

稚アユものめる冷水病薬

病気におよびえるアユに朗報——。アユの冷水病を研究している神奈川県内水面試験場(相模原市)が稚魚でものみ込めるカプセルタイプの薬を開発し、市販の見通しがたってきた。全国的に漁獲減の原因になっており、対策の「切り札」として期待は大きい。

(須田世紀)

神奈川県内水面試験場

冷水病は細菌のフラボバクテリウム・サイクロフィラムが原因。体の表面に穴が開いたり、えらから出血したりして死んでしまう。今年もアユ釣りシーズンが到来したが、例年と同様に冷水病の被害が起き、滋賀県の琵琶湖に注ぐ安曇川では大量死が確認された。

もとは北米のマス類の病気とされ、日本では87年に徳島県で初めて見つかった。その後、全国の養殖場や河川のアユでも確認され、アユ冷水病対策協議会の調べでは、06年度は全国339の養殖場のうち、107で冷水病が確認された。漁獲量減少の原因とされている。効果があるワクチンは分かっていたが、小さな

直径1ミルカプセル、エサに混ぜる

稚魚に1匹ずつ注射するのは手間がかかり過ぎる。ワクチンを入れた水槽に稚魚を漬ける方法も試したが、魚体を傷めるなど決定打にはならなかった。

県内水面試験場が動物専門の製薬メーカーと共同で開発を進めているのは、直径1ミル程度のカプセルにワクチンを入れる方法。さらさらしており、エサに混ぜて食べさせることができる。04年の段階で投与したアユの個体すべてから抗体が確認されたという。

カプセルの量産体制の確立やワクチンの持続期間の検証など課題はあるが、早ければ2年後には市販される。試験場で開発を担当する原日出夫主任研究員は「着実に実験を進め、早く商品化にこぎ着けたい」という。

ワクチンをカプセル化する技術はアユ以外の魚に応用できる可能性もある。国などに冷水病対策を要望してきた全国内水面漁業協同組合連合会(東京)の担当者は「何年も悩んできただけに期待は大きい」と話している。



実験で人工腸液に漬けられたワクチンのカプセル―神奈川県内水面試験場提供